

クラークケン

かぶらやこうし
鏑谷 矢

ピンポンピンポンピンポン——狂ったようにチャイムが鳴りだした。

雷鳴のように、ドアが連打される。

「ひいー」

部屋の隅で、男が頭を抱えて震えながら泣き叫んでいる。

「助けて、開けて。早く開けて」

ドアの外からは、女の金切り声が響いている——

「やあ、パオラ」

スーパーマーケットで見慣れた顔を見つけ、僕は声をかけた。

「ハイ。タカシ」

彼女は挨拶を返し、近づいてきた。

イタリア系フランス人の彼女は背が高い。

ヒールを履くと、目の高さが僕より少し高くなる。

「何を取りに来たの」

パオラは、英語に切り替えた。

「野菜ジュースさ。君は」

僕も英語に切り替えて尋ねた。

「ミネラル・ウォーター。日本に来た時は、水道水が飲みやすい国なのに、なぜって思ってたけど、今は助かるわ」

話しながら、僕たちはカゴに必要なものを入れていく。

「生もの以外は、まだまだ保ちそうだね」

「そうね」

「そうだ。君に伝えておくことがある」

「なに？」

振り返った。パオラの顔から目が流れ落ちた。

顔の皮膚が干からびて、ミイラのようになる。

「一応、言っておくけど、君の顔、ミイラみたいだ」

「あなたも頭の半分がなくなって脳がむき出しよ」

「ひどいな」

薄暗いスーパーマーケットから出ると、パオラの顔はもとに戻っていた。

「竜也と真奈美が宮崎に向かうそうだ」

立ち止まった。パオラが不思議そうな顔をする。

「東京では住めないの？」

「二人とも宮崎出身で、両親が向こうに住んでいるから、行ってみたいんだろ？」

「連絡は取れないのね」

「駄目だ。通信網は戻っていない。もう元通りになることはないだろうな」

そういって、僕はひとけ人気のない新宿の街を見回した。

かつて行き交う人にあふれていた街も、今は廃墟と化している。

目の端に動くものを見つけて振り返ると、巨大な虎がこちらに向かって歩いてくるところだった。

「。パオラ」

「虎ね。見えているわ」

「ご苦労なことだ」

僕たちは、並んで虎に向かって歩き始めた。

近づくと、虎は強烈な臭気を放っていた。獲物の血と肉の匂いだ。

「生きているうちに、虎の匂いをすぐ近くで嗅げるとは思わなかったよ」

「そうね」

虎は何もせずに、僕たちとすれ違った。そのまま通りを去っていく。

「。パオラ、寂しくはないかい」

「大丈夫よ。あなたは」

「僕も大丈夫だ」

「じゃ、またね」

「元気で」

パオラと別れた僕は、歩いて西新宿へ向かった。

駅前のビルに入り階段で四階へ向かう。

いま、僕は、このデパートのショールームに住んでいるのだ。

電気は止まっているが、電気売り場でいくらでも乾電池が手に入るため、夜の生活に支障はない。

一番高価なソファを引っ張って、壁一面が窓になっているエレベーター・ホールまで行った。

注意深く窓の外に向けたソファに、深く身を沈め、さっき取ってきたトマト・ジュースを飲みながら、暮れゆく太陽を眺めた。

見下ろすと、通りには怪物と猛獣が溢れていた。

鋭い音が、耳をかすめて飛んでいく。

壁を見ると、矢が突き刺さって震えていた。

僕はため息をついて目を閉じた。

目を開けているかぎり、余計なものを見せ続けられるに違いない。

その物体が地球にやって来たのは一年前のことだった。

偵察衛星を打ち上げて、レーダーで世界の空を監視している大国は、すぐに「それ」に気づいていたのかしれないが、一般人が知ったのは、夕方のテレビニュースが最初だった。

国家首脳たちは、隠蔽いんぺいしたかっただろうが、そいつはラスベガスのすぐ近く、しかもアメリカ独立系メディアが生中継している砂漠に轟音とともに激突したのだ。

隠すことなどできはしなかった。

今となつては、「それ」は激突したのではなく、一番楽な着陸方法を取つたのだと皆が知っているが、当時は大変な騒ぎになった。

まず、最初に彼（それ？）を、肉眼で目にしたラスベガスの観光客たちは半狂乱になった。

ハンディカムを振り回し、砂煙をあげる「それ」を追いかけるカメラマン。

女性アナウンサーは冷静な言葉を失って、意味不明な言葉をわめき続けた。

ただ、その衝撃の映像と、アナウンサーが最初に発した言葉から、すぐに、

宇宙からやってきた最初の、そして最後の訪問者の名前は決まったのだった。

「クラーケン」

宇宙から飛来した「それ」は、まさしく、伝説の海の怪物クラーケンのイメージそのものだった。

海より現れ、船に絡みつき沈める魔物。

ただ、それが絡みついていたのは、船ではなく、銀色に輝く巨大なロケットだった。

長さ三〇〇メートルはあるであろう、巨大なロケットに、同じほどの大きさの軟体生物らしきものが絡みついて宇宙からやってきたのだ。

その映像は、ただちにインターネットで世界を駆けめぐり、ラスベガスにいた観光客が撮った写真や動画も、ほぼ同時にネットに流れたため、合衆国も事態の隠蔽をあきらめた。

巨大で奇怪ではあるものの、クラーケンは特に危険そうには見えなかった。大統領が、すぐに軍を出動させたのは、マスコミによる危険な突撃取材を止めるためだった。

一時の狂乱が去ると、人々は口々に、この、予期せぬファースト・コンタクトにどう対処すべきかを話し始めた。

識者は、巨大蛸と何とかして意思の疎通をはかるべきだといひ、保守的かつ好戦的な者は、害を及ぼす前に殺すべきだと主張した。

砂漠の強烈な太陽でクラークンが干上がってしまったのでは、と心配する動物愛護団体もいたが、数日たっても、「彼」に何の変化もないため、その声は黙殺された。

そもそも、防護服もなしに宇宙を飛んできた生物が、地球上の太陽光ごときでダメージを受けるはずがないのだ。

政府は、長らく公式見解を発表しなかった。

今ならわかる。

彼らもクラークンをどう扱って良いかわからなかったのだろう。

外見から見るだけでも、精巧かつ先進的で、我々人類のものが原始人の松明に見えるほど進んだロケットと、それに掴つかまってやって来たらしい大蛸。

内部構造を調べようにも、蛸もロケットも、あらゆる電磁波を遮断し、あるいは吸収してしまうため、それは不可能だった。

対話か攻撃か、世界を巻き込んだ論争が続けられ、時だけが無為に過ぎていたのだ。

その間、「彼」は……今の僕は、クラークンの考えを知っている。

彼もまた、とまどっていたのだ。

彼は、銀河の先端、広がりつつある宇宙の端近くで生まれた生命体だった。

生まれた時点で、彼は、すでに不死身だった。

寿命もなかった。

仲間もいなかった。

一度、恒星のエネルギーを取り入れると、彼は、人類時間の数億年間を活動することができた。

さまざまな宇宙を彼は旅してきた。

移動には途方もない時間がかかった。

しかし、寿命のない彼には、時間の概念も無かったため、それは問題ではなかった。

ある時、彼は、宇宙空間に漂う、壊れてうち捨てられたロケットを見つけ
た。

生命体は乗っていなかった。

彼は、その奇妙な物体に興味を持ち、調べた。

そしてその物体の破損箇所を修理した。

調べるうち、自分が今までに得た知識を使えば、さらにロケットを強化し
高速化できることに気づいた彼は、改良を加えた。

その作業の途中で、彼自身にも変化が起こっていった。

それまで漠然と生きてきた彼が、それを造ったモノと会いたいと思うよう
になったのだった。

いつしか、それが彼の生きる目的となった。

その後、彼は多くの星を訪れた。

だが、ロケットを造った者たちに会うことはなかった。やがて彼は銀河系
にやってきたのだ。

そして見つけたのだった。自分の乗り物に似たものが、まわりに浮かぶ惑
星を。

それが地球だった。

地上に降りた彼は、この星が、今まで訪れた、どんな星とも違うことに気
づいた。

ここには、貧弱で、小さく、ランダムに動くモノが多数存在したからだ。

その数を数えて（彼にはその能力がある）、七十億を越えていることを知
り、彼は少しだけ身震いした。

彼は、小さいモノを調べようと思った。

外見から判断しただけでも、その生物が、彼の探す「ロケットを造った者たち」でないことは明らかだったが、この小さな生き物には、何かしら不思議な魅力が感じられたのだ。

実際に触手の届く範囲にそのモノが来れば簡単だったが、なぜか、それらは近づこうとはしなかった。

だから彼は、宇宙空間で使う見えない触手、エネルギー触手を使って調査を開始した。

それらは、単純な構造のモノだった。

だが、先端部（彼は、その生き物たちが、それを脳と読んでいることを知った）に調査の触手を伸ばした時、心地よい刺激が彼を駆け抜けた。

（これはなんだろう）

彼は有頂天になり、触手を七十億に分けて伸ばし始めた。

彼の触手は二億キロ伸ばすことができたのだ。

始めに死んだのは、ホテルのガードマンだった。

クラークンのやって来た翌日、彼は、たまたま仕事が休みだったので、軍が封鎖するぎりぎりのラインまで近づいて大蛸を見ようとしたのだ。

突然、彼は崩れるように地面に倒れ、軍のヘリコプターで運ばれた後、心臓麻痺と診断された。

ひとりの医師が、その診断に疑問を持って、死体を詳しく調査した。

そして、彼の脳が、特に前頭連合野がダメージを受けていることに気づいたのだった。

医師は軍に連絡を取ろうとした。

だが、それは叶わなかった。彼も病院を出る前に死んでしまったからだ。

クラークンは、触手を使って感じた初めての「ヒトの感情」に興味を持つ

あまり、彼のエネルギーがヒトに与える影響を忘れて、「深く調査」し過ぎてしまったのだ。

そして、そのショックに耐えられなかった人々は、次々と死んでしまった。こういった知識は、あの第一次クラーケン・ショック（と僕たちは呼んでいる）を、生き延びた者全員が知っている。

クラーケンと一度繋がったものは、彼の「考えのさざ波」とでもいうような、弱い思考を受け取ることができたからだ。知識と同時に、僕たちは、クラーケンが巨大な異世界生物なりに『後悔』らしきものを感じていることも知った。

それは、おそらく、恒星や惑星など巨大なものばかり相手にしてきた彼が、人類と接したことで初めて手に入れた概念だったのだろう。

クラーケン・ショックを、何とか生き延びた僕たちだが、問題もあった。感情が消えてしまったのだ。

前頭連合野が生み出す「恥ずかしい」「あこがれる」といった高度な感情のみならず、扁桃核が生み出す「快、不快」や下垂体が出すホルモン分泌までが機能不全に陥ってしまった。

以前、大学の研究室で、その種の研究に携わっていた僕にはよく分かる。そういった脳幹近くの機能に異常が起きると、生物は生き続けることができない。

〈戻してみせる〉

ある日、強い決意が、黙々と死体を処理する僕たちの頭に響いてきた。クラーケン・ショックを生き延びたのは、全人類のわずかに0.01パーセントに過ぎなかった。

七十億存在した人類が、一夜にして七十万人になってしまったのだ。

僕たちの目に涙はなかった。泣こうにも泣けなかったのだ。

だが、やるべき事は分かっていた。亡くなった者を衛生的に処理するのだ。その行為に没頭した僕たちは、二ヶ月で、おおよその死体処理を終えた。幸い、その間、大きな疫病の発生は起きなかった。

感情が無いというのは不思議な感覚だ。

穏やかで落ち着いて、そして何か大きなものをどこかに置き忘れている、そんな感じだ。

感情がどんなものだったかを思い出したくて、僕は、昔読んだ恐怖小説を
読んでみた。

だけど、以前も読んだ時、どこが怖いと思ったのかすら思い出せなかった。

それどころか、ストーリーの破綻はたんと、こじつけばかりが目について、途中から先は読みたくなってしまった。

おそらく、恐怖というベールに包まれていたから、そういった瑕疵かしが目につかなかったのだろう。かつて、部屋で、独り、読むことができなかった恐怖小説が、素人が書く独りよがりな日記のように思えるのは、本当に奇妙な感覚をだった。

人口の激変で、通信は途絶とせつし、電気、ガス、水道は止まっていたが、なぜか世界の情報はよく分かっていた。

どうやらクラークンが間に立って、穏やかに情報伝達をしてくれているようだった。

こうして、十ヶ月前から、僕たち残った人類は、かつての文明が残してくれた食料を食い潰しながら生きている……

涙無く、笑い無く、恐怖も無く——そして未来無く。

今の、僕のたったひとつの望みは、クラークンとロケットをこの目で見る
ことだった。

三ヶ月前、クラークンから知らせがあった。

例によって、はつきりとした言葉ではなかったが、何とか元に戻せた、という感覚が伝わってきたのだ。

しかし、実際には何の変化もなかった。心が感情で苛立つこともなく、穏やかな日々は続いていた。

そして、次の日から幻覚が始まった。

恐怖を感じないから客観的に幻覚だとわかる。

突然、あり得ないことが起こり、あり得ない状態になる。

この状態については、なにも連絡はなかったが、おそらく、クラークンが、感情が戻ったか否かをテストするためにやっていることだろうというのが、皆の一致した意見だった。

スーパーマーケットで会った翌日、珍しく僕を訪ねてきた。パオラを連れて、以前に住んでいたワンルーム・マンションへ向かった。

部屋に入ると、バッグに必要なものを詰めていく。

穏やかな目で見つめるパオラに向かって、僕は言った。

「アメリカに行くよ。死ぬ前に、クラークンをこの目で見てみたいんだ」

「どうやって行くの」

「油壺のアリーナにヨットがある。この間、ガソリンの入っている車を取り

継いで見てきた」

「本当に行けると思っているの」

「ああ。計算した。六十パーセントの確率で行けるはずだ」

「救助はないわよ」

「わかっているさ」

「そう」

パオラは肩をすくめた。

「じゃあ仕方ないわね」

突然、パオラの首が転がって地面に落ちた。

「わたし行くわ」

地面に転がったままのパオラの口がそう告げる。

「君の首が、そこに転がったままなんだが」

「あなたも体が裏返っているわよ……いいの、放っておいて。ドアを閉めたら消えるから」

「パオラ」

「なに？」

「さよなら」

「じゃあね」

彼女の言葉どおり、彼女が残っていた生首は、ドアが閉まると消えた。

サヨナラ――

ドアを見つめながら、もう一度、僕は心の中で呟いた。

その時、凄まじい風鳴りがして頬を何かがかすめていった。

毒矢だった。心臓が止まりそうになる。

同時に、隣の部屋から巨大な熊が歩いて来るのが見えた。

立ち上がって覆い被さるように僕に襲いかかる。

「わああああ」

内蔵を掴まれるような恐怖で僕は頭を抱えた。叫び続ける。

遠くでチャイムの音が鳴り響き、女の叫び声が聞こえたような気がしたが、

それが何か考える余裕はなかった……

いつの間にか、チャイムの音は消えていた。

立ち上がった僕は、玄関まで歩き、ドアを開けた。

ドアの横の壁にもたれ、涙に濡れた瞳でパオラが僕を見上げていた。

「パオラ……」

手をさしのべ、僕が声をかけると、彼女は素早く両手を僕の首に回して抱きついてきた。

激しく泣き始める。

いつしか僕も泣いていた。

でも、辛くて悲しくて泣いているのではなかった。

感情を取り戻し、初めて流す涙は、本当に心地よいものだったのだ。

干し草の匂いのするパオラの髪に顔を埋めていると、東の空から轟音を響

かせて何かが近づいてきた。

僕とパオラはもつれるようによろめきながら道路に出た。

そして、はつきりと見たのだった。

巨大な銀色のロケットが、朝焼けの空を圧して飛んでいくのを。

そしてその銀の塔に絡みつく、巨大な蛸に似た生物を。

「ひよっとして……」

「彼」は、最後に、残された人類に自分の姿を見せるために来てくれたのかも知れない——その言葉を僕は飲み込んだ。

ロケットは螺旋形に爆煙を残して空の彼方に消えていった。

「行ってしまったの」

パオラがたずねる。

「たぶん」

僕はうなずいた。

そして、美しいクロソイド曲線を描く煙の跡を目で追いながら、呟いた。

——クラークンは、彼の生まれた銀河の海に還っていったのだ。

了

最後までお読みいただきありがとうございました。

感想などございましたら、ブログに書き込んでいただくか、以下のアドレスまでお寄せください。

e-mail:kazanari@kabulaya.com

鏑谷嘴矢